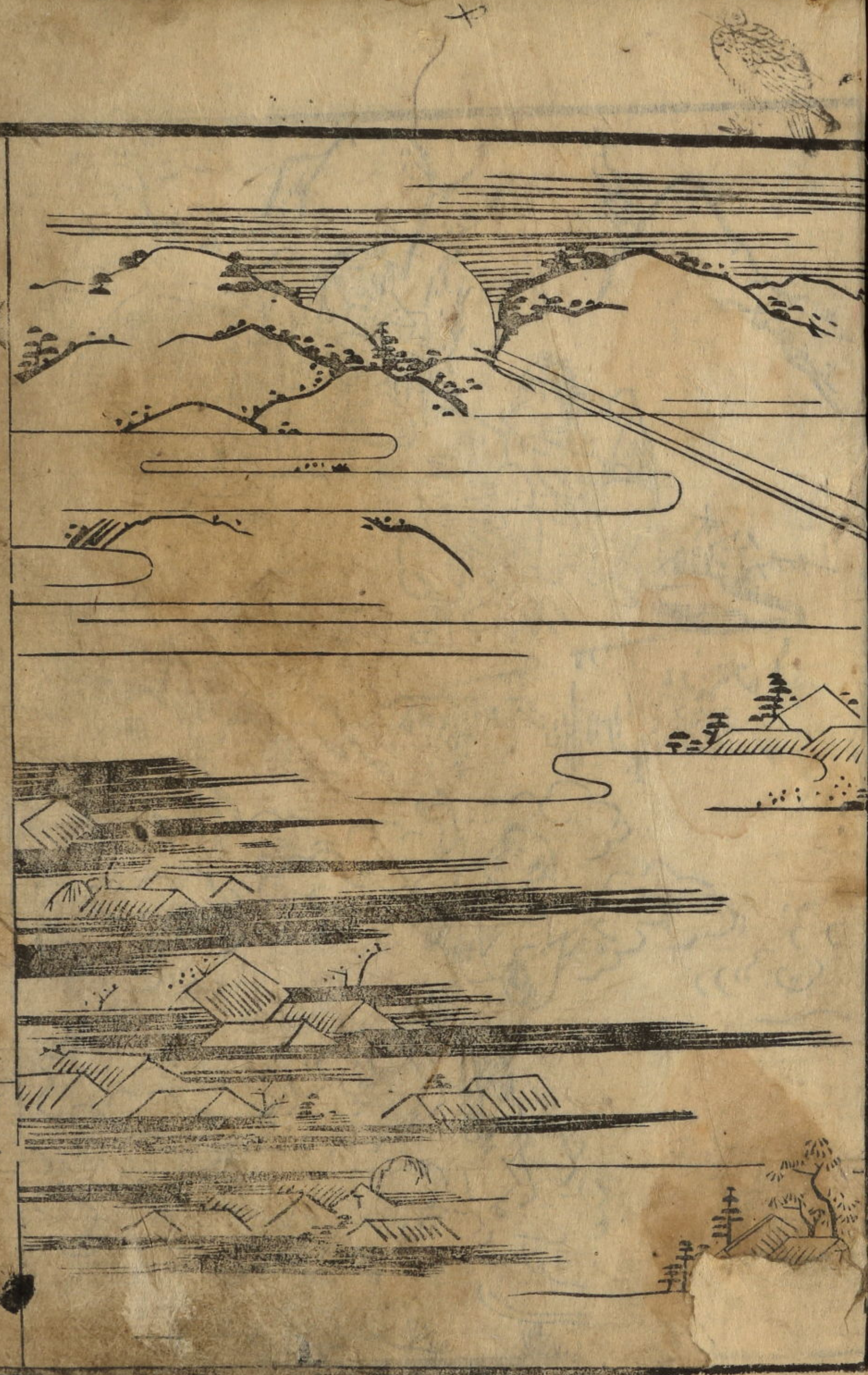


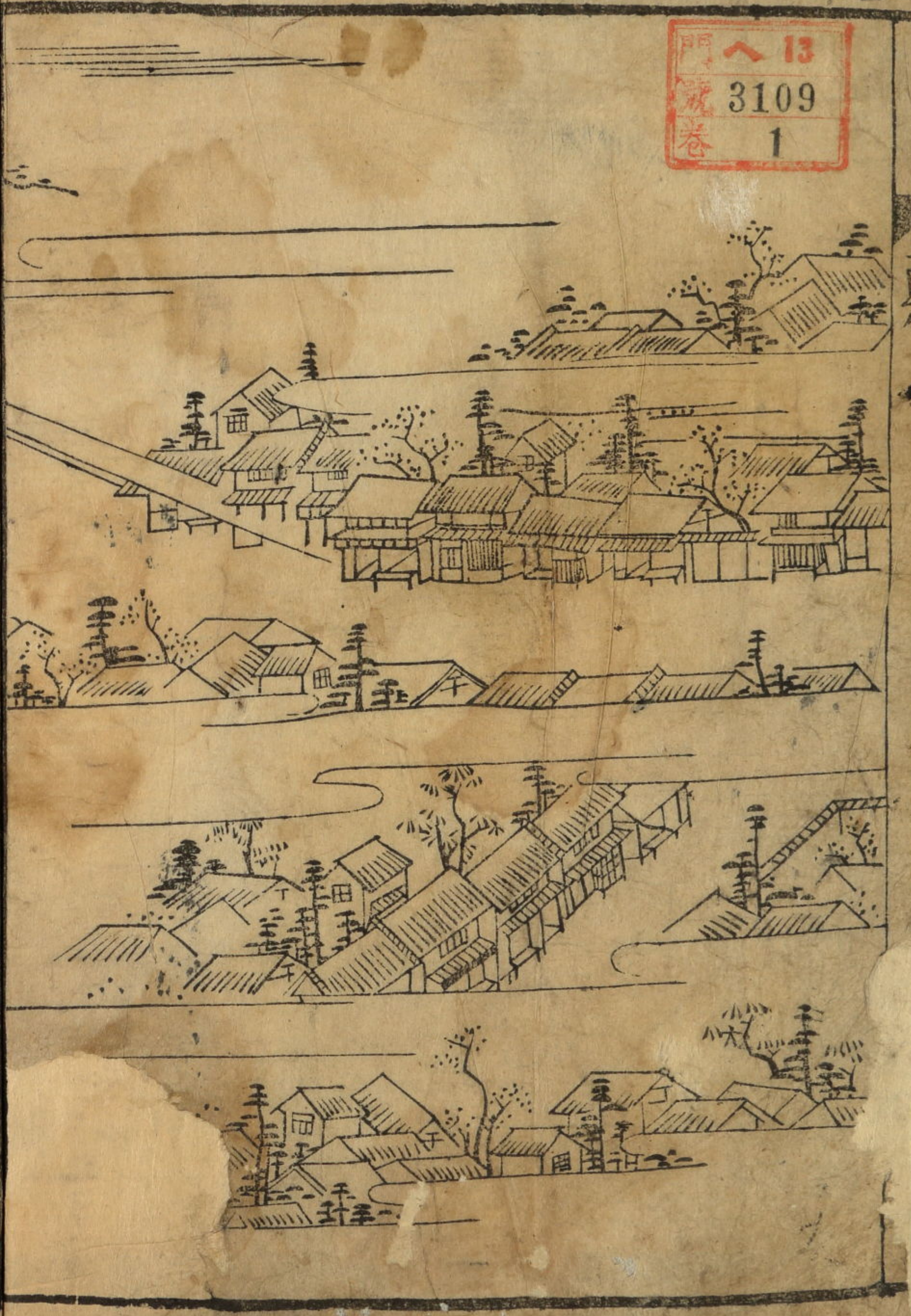
東唐細見新

~ 13
3109
1





明 へ 13
3109
卷 1





東唐細見嘯

卷之一

物集山

大虚者

大虚者... 何玉... 市稍... 三百年... 陀... 川の水...
大虚者... 何玉... 市稍... 三百年... 陀... 川の水...
 大虚者... 何玉... 市稍... 三百年... 陀... 川の水...
 大虚者... 何玉... 市稍... 三百年... 陀... 川の水...

敵がわづのそづ一吹暮地三吹風にゆく
たぐらうけりハヤ一ざ成るも之まより清
風ハヤれご雪の何底乃定めり芭蕉平ハ我
才なぐもがてんゆれモウどぞ人為そ家物
トヤガと思へこは身にぞくうり神る事自由
なりだたよふ雪つくの極よるりさよら
とくさるやらの内よる道蕉平くことふ
なんどぐやこれと行くてあせんさる

あゆまきこころげらふのどく染ハ見之
只やえとらくと思ひーが山頂上も
思ふ程放さうりうりさよらうり息
つそあさるとえとせバグひんども十
もあまりてはくに洞をそりへけおとぞく
こ思ふぞ夜しそハ物集山こふ知え扱も世界
ハ韻人もあ物ふ毎力自在とゆ一才に
及ばざる異玉めぐり驚愕さるハさる統一

のしりく一折一折ハ鶴と云靈金に氣候
くじの字さんどなまきと今友ハ鶴も
次早仙人の性と持一其の是よりを
士と修りらるに痰軟人車斗りが
敵く所持するけ羽衣三ツの徳有
しそも是のちやむとさるる又
る一日食らゆと入るけ羽衣と所持
をさるいと思ふるや一ぬ小ぢらん

恙一是より東へ八万里とすそそ大湯
子くも能く極むけと思ひもろぬ天
礼ハくらてふ礼のさうこと三
とがよまるとい礼もそそく
成一是より小大湯西へ風又
さうとぬ

大湯翁

去程より芭蕉平ハ大風のるん

有り天狗の情より方にまきふらる相成と祝
とも思ひ敵身をさし死行り救方里と
きせと書と来てハッともみせびくくぞもふ
と羽衣の徳とらんこころる衣とあまなり大
湯玉ハハもろや路程何布ど成せと尋ねるバ
おハソと子と我々ようもむらやおのそ今一方お
二百里とこころふれバハ小歡天喜地扱も打
ふらぐいさく是ハ何れを便宜的東西とが

へ下修せく死に内又一英里もまきこ思出
何とくく心うましく面白くは敵身もぐり金
ゆらぶと是ハどうも何でけ積小使活成さるや
中道はく活こころん下は右側の山でうん大
十町四方を大池の中へみよのみのみよ
行こ道バちまう成を中みよハ陽月此す成
に標の本よハ書さくを今とさうりこかん
なしくこなりハ桃花のもふやまハ伊とこれ

山茶楓葉一舟に咲みぬる枝葉のよそぢい様
 棠躑躅華牡丹を四季の月うちらる陽氣あはれ
 花さうと芭蕉平仄くこなるめハテめづり
 四季の草花枯木とよしてハッもろく時と忍み
 見事さうと池の面とながひまば水中の紫葉
 とあぢむ水音立ちう一面小紅乃池とる
 しくまるく成名の面何でもこころ面白く
 夜不涙とさうんとせ中らるとらりと川ま

池の極子とる成りどろくをいふが物
 集山とてつれくる大湯水の成り成り
 陽氣さうんにましく草木草花は四季の障り
 る正月らる極月をまもまぐぬ花さうり
 又池あり水のくくよ赤まは地中の陽氣
 水よりるの之を産生も新安の黄と大池
 了して赤砂泉こよ江川有申くおどろく
 小く次今子二百里計り行達るは太陽の



こころ
さびし
い

ヨウ
さう
る

こころ
さびし
い

人どやこゆらうかをせバ目とあらうやと面白
 さい中とや是れ思ひ給祿入こそうかイヤラう
 あいこの我ハ日本といふ玉の若でござるがけ玉
 冴るびー大陽くそふ柳く面白さ者極よ
 思ひぬすいぬ礼ハ容恕とそまのよふおの
 むの世世話でござ成こ家居のござるは案内程
 こころさかめだかくせだ托あぞまハ何よりをあい
 事幸すうか内がむらいいアこらちござんせご

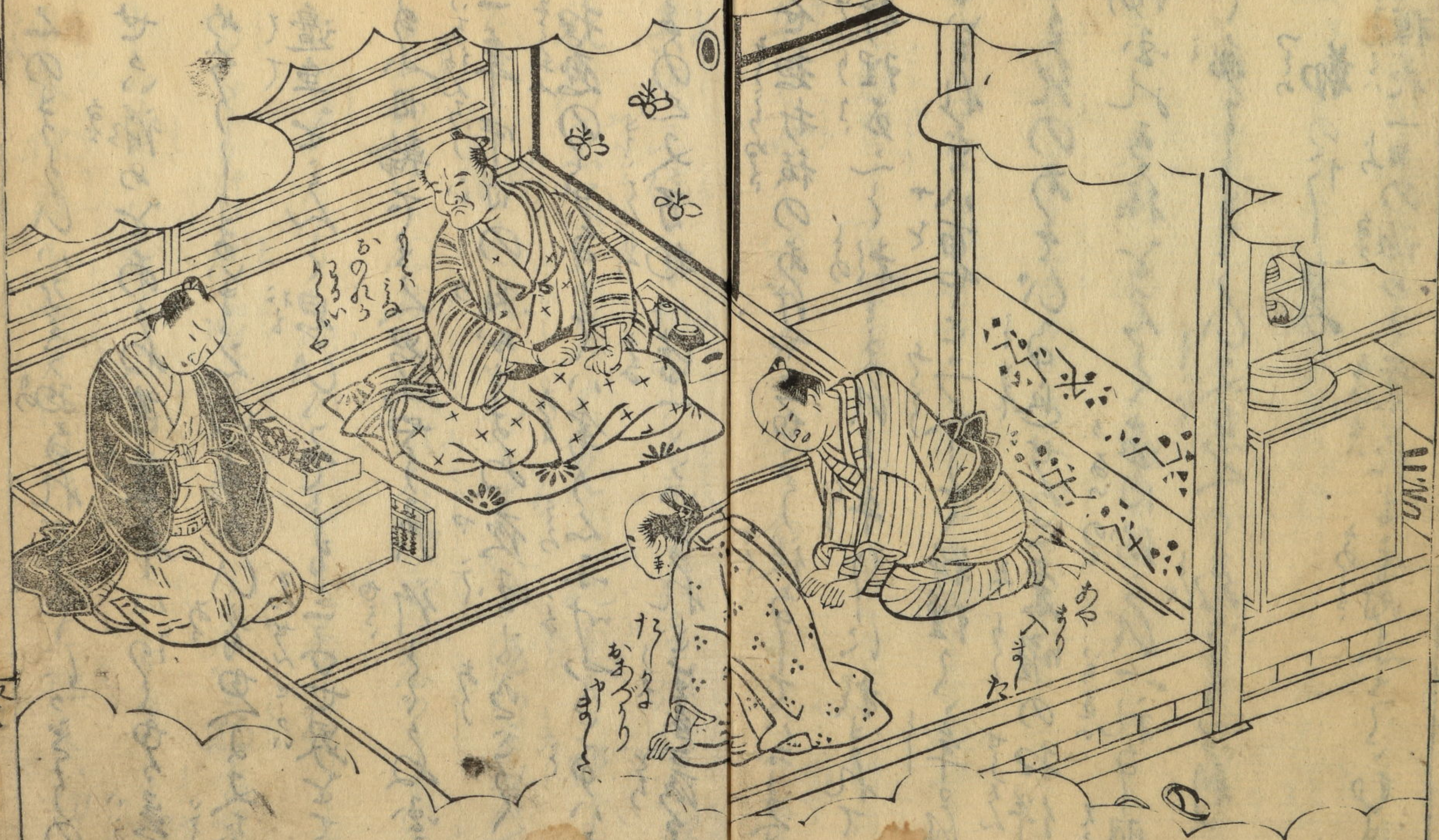
てんでふむらうをむらうれ羽衣るげゆりくこあ
 女子れ肉ハそ惹けらるん、奥へくそどなくれ
 一間のゆへ入方とくらげて扱次の一層とこれバ
 ニらうしそ山姨のつま川葦ハれおとらふ七
 の道り出入ハ八百やがはさきの杉蔵系や大
 坂の文七風者ハ務らるゑんと外くるこる
 中もも女中のこゑなくねませそ
 やめりしてりや者をうらこみうら案十郎ハた

けふハズ人おかり傑もニツゆびとらとハ成ま
 せぬアアきんそくれま月十二と程づハ
 一がいちがいふらびあふくめ々の男い付ふ身に
 さ日ぐが一年中の一とま、えんやのへあんでも
 なるは是くろめくに役者成てもうらうせて
 ちのくせもやせらんへ体面を済ませぬ物ましくも
 ぶぞ憩留して三月四月もたら肉ふハ賊歳と云
 て日午で世一のやうあるやあ、賊鬼の者うけ
 げいりやあ

おをせ想打板のあげやまこう役やでハおます
 ま料理のことおまると平形に頼まれてや
 ともいふおと八百やこ二人と料理く、年と
 大さるおのあそびりせせんこ業曜のお伴色
 大湯ふれお指とんくお肉おらび一礼や羽衣
 ねておらうまうい又とくとおらうら利

鞠のたしなみ

桜花一日の誦めと業花もま対ふさうしむまは



た
あ
ま
り

あ
ま
り

あ
ま
り

心のまろしいなまらぬあられごもくにとぞうのまひ
 せふ詠めとあぬ芭蕉平ハ何くゆら雲と
 めぐりーまゐまゐのまろしい有也よ又東去れ
 邊魚とえんと思ひいそごも三子世界とてし
 めふ日輪でえん思ふやうよハ祈とぞぬまゐそ
 一年中日の目かぐまぬ夜もあさくぐん
 相懸のゆるやそハ集ふふ小竹あさくぐんハあ
 そのえ又百物ハ皆一いついなれと生身一落り

其徳のゆる物あさくぐんまは主れ位も親小ハ
 親乃悪徳を見えあはえの礼儀を祀まも
 なくも姉も妹も持て生れと徳ハまふれ
 る世かろぬ物之始け大湯由來つーに田中
 といふうりうち徳の風を布りたり
 るゆけ茶囉茶花弁才と持らせい
 しい事ハ神とてあさくぐん老もあさくぐん毎日く
 弄春探勝もつ骨にがいがさるに後よハ切老が

本来て主親の目筋と並びぬけつらうつ
 の青樓ぐらいまもくドめよるまへんぐ小照智
 さまりて主の是見親の折檻も辱ふと
 次座次の一つ失ふく移し優優地の三八下
 くは肉よそらくつまぬやがってさうさ
 終よはんらと主身とともひるゆ佐あるあり
 されども主ハ家来とお目まると親ハひと人よ
 せんこちい妻子ハ主罪と小くんでまんと小く

東

まぶとるハ向後改めて家業後世とたすめ
 けいよくあがらぬめらまの詞もすあうま
 主身の日ざつし親認てあんでせんら
 こつ一代も一年中も一月も一日もさ
 めるお心つあともうせばんもろんぐ我身も
 なんぞけた湯玉も湯気がけりてうま
 事を志す孫バ認んまへぬ小
 子代もけりぐりくと芭蕉卒もわ

ろくろと又悔こり

東唐細見嘯 卷壹終

東唐細見嘯

卷之二



大陸前

玄福に芭蕉平大陽まよて百日余り此邊首
不葉花の妻もふと三羽衣と成にまよひ
中と飛行鳥のこくと又四六第里を東のこくと
るんのくもるく羽肉よあひうらうらう後祖成
くる流先とあともあひやああ合に入
よ夏よりとんまひとふ大湯と大差

二
三
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

出てもある事之末とある御郡町かり家の名や樹木
のうへに述とるるに御郡大小にうごき一町の田
下大屋一うんである是とある夫のとくまら
いちち中ふと巻城ゆりとる一塔寺くの寺家
のてつよ立ちあふ人本は常成本津と好
あるいハ高野様とるこの本白桂木のそを
弁茶の味よるるまのではよるるす本茶を

松竹梅の陽気成とていしね毎くす
門に忘れとるると山伏祈禱神道若菜
のそまきやういばまの家入るの酒
肴禁割と書身一ふ芭蕉平ももど
まの字うらやまのつひなめいま
くらとれとためらすめつえとれ入るお
家くに常とつらうんの子となし調
くれやる念仏題目本意の書ま



ちつげん
ちつげん
ちつげん

火用心
叙西入
元堡



ちつげん
ちつげん
ちつげん

ちつげん
ちつげん
ちつげん

あられくさくさのうらみはけりしこの門と
 も花のうらみはけりしこの門と
 かくらびとくさくさのうらみはけりしこの門と
 より方丈もさか家の内よりさか家の内より
 あらうくあらうくあらうくあらうくあらうく
 なまきばやうくあらうくあらうくあらうく
 けりしこの門とくさくさのうらみはけりしこの門と
 けりしこの門とくさくさのうらみはけりしこの門と
 けりしこの門とくさくさのうらみはけりしこの門と

心身おのれおのれおのれおのれおのれ
 りあうんこじん小長傳とやめあいなま
 けりせんとおのれおのれおのれおのれ
 きけりあうんこじん小長傳とやめあいなま
 是よりさか家の内よりさか家の内より
 地の廣さくさくさのうらみはけりしこの門と
 くらうくあらうくあらうくあらうくあらうく
 くらうくあらうくあらうくあらうくあらうく
 くらうくあらうくあらうくあらうくあらうく

不中ぐとらりて遠苗せんことくも宿やり
 う西とみ守えらるる人ハ程あはれ行分
 程となれごふれふ十萬たのこころしこおとび
 えられごの男もんと志げめさやうれ
 なう敵もあんどこりなごうんごう
 玉のゆられバ日本の守備までハ一日も
 叶はぬ只柳ハみごと花らるるハ
 若しと只るの候小らハ飢寒喉飯昏暈眠

文に思兼ユまをつい中々ハ
 所々ハまま候の候とまも
 ち成程せまじし
 舊平を何ハ小遠愛やぐ
 ちづひさく信法門ハ入へハ又
 元げまハ日本の地とさるる
 くるめきハさうれバ日本の東
 境也ハさるる平ハ東ハ子
 里ハ元ハ大陸

とよむハ是らうとみ新ハみ里あるうた陽成は
ま大陽の玉より又ま新里南よ南日輪の
うらまふ風ちあま支那小けま日輪のおま
後く南四季十二ヶ月のまるくめくは日の
目とおびるゆき只おあら月夜のかき小
て何ゆも法事一毛よおま陽成はうら
陰一とづと苟且も陽成はとあせめいくの
根よるあづきさついとまのくの道程つーと

小つーとまかつーとまを報えをせんお舞
礼曲ほこまの極びるは毛才一のつや
このおるるととやそ誠よ字よ入るハ字
グ(寺)小入てハぢうむにるまこのこ
の事あはれ會得ちーくれバも同道と
礼ひまう初く大座の肉(つき)座り洗足あ
へ休とにらう晩喰のーらと芭蕉平もほじ
つかー支願つーとあ月の光景とこれハ内海

とくろくそくそく一めん熱藻井ハ撰笛筆集
 笛のうろあまこれ類遊楽のていん舟の屏障
 ハ金絳彩より菱葉と因西蘭會の招魂此景
 の楯間ハあまら菩薩来迎のていはらうたあ
 床の掛軸ハ檀特山のわきこれ絵う厨間之
 とみまば杖葉あまの護火の符王うくせん想
 六親多んぞくれ戒名とより又別荘ごうさの入
 口ハ廊下つてさあは三回布ぐるぐ寶幡華蓋

とつらとつらばそつらひやうせんあるやや内うつらこ
 奥のるうりあるととてむさひはよ白ぬめの
 角帽とあしちいとむ勝もく立お芭蕉平に
 長揖し婢とらびて晩餐の打點分付客へ
 料理ハ海藻めの菹物と莧弱の白和りのと
 早子まぬね又まらことあつてせんまらとら
 らうとまらす奥へ入らるが食次の椅子をさるも
 かなぐりぬぎのとまらうとらうさうとらう

物でい者ちりしちめーとくハをバけまに足とめ
 もろくぶとソクくよんとくぶさーしあんり
 五日も夕ボかれ内ちんせんぶ子饌とそろくさーづの通りが
 のうくまらつうとろりけ持あつよとささこ乃
 香かの鼻小付こふやしよん各嘔るまきとさしじんをた
 とらまきひびじくくして日かとささげ食頃も
 かり困園つうこーらつとのど一こひひのけさげて
 せりくふんざんとのまきーいれまてまらるる

へうま夜よハきあつひふらりニ疲倦こやまをける
 またり毎まい日にちくまらその合あとくひさしめ六
 十日も返かえ面めんせーにあ日にちちいこたなくがこそり合あ
 ころくろあとしひくんと子こお積小狼小芭蕉は平へい
 冨ふ年ねん立た極樂ごくらくでま者もの登のぼんと移うつよ一人ひとり云いま
 が通とほつとくまけあくまからめ六十日もあ
 肉にく酒しゆ一滴いつてきものごとをま素饌すぜん繫つ糸いと成なりの
 佛ぶつの行ぎやう系けいんん果くわくらお小幸こさいいい嫁よめととよよ

陽氣ひかりのゆくめとするは情こころは酒さけと茶ちやらんぞ
 るりと一ひと一ひとさ香かほせんといふも一ひと丸たまごのち
 せんを情こころ少すくよ一日いちにち立たて二日ふたにち立たて之日ひ目めハ定さだめ一ひと通とほる
 嫁よめとむくのこころもそこのくに日ひもくもむけ
 ハ神かみ次つぎのううと法はりもに子こ嫁よめのち物ものを身みしこ
 えくくさくくいふと急いそと中なかつのよ銅どう鑼ら鏡きやう鏡きやうとそ
 き立たて門かどをくなれさせぬ祈いのち人ひと以もつ樂がくの前まへ尊たうハ坊ぼう主しゆ
 四人よににんと百ひやくとつまぐらてんかいさうけお門かどまじ

本ほんり風ふう情じやう白はくをりりりの提てい燭じやく小せう火かと點てんしづい
 一ひと少すくく死しぬハハくらと人の遠とほくく芭蕉ばしやう平へい驚おどろ愕がく
 うらうら見みハともや悔くわい氣きかつとも恨うらみんぞ
 一ひとと嫁よめ入いぐましくそりれいどやさうりといふ
 柏かしわ子こに成なつてさうなんが葬まうが嫁よめ入い嫁よめ入いが
 葬まう礼らいても酒さけハ一ひとくハさうまうさあこつ
 中なかつの味あじ居いる奥おくのるよまうぞが願ねがひ子こ等ら
 としいづみとちつともさこむけこも女おんなも能あた余あま

がくさぐり口ろくおつる入のちぐひもまい急
 須茶見行手にぶくりくこ四又い暗
 わぢといもせだのここれどなんのつりし事
 るけまは是はぶく酒まぞと舌おろして
 味道しむろ小沈壇のあをいそ郁こす系
 ぞうと神のるひの南り男をぶぶぶぶ
 小こ過右れ悪い婿入しやとまの酒でいませ
 ぬとすおつるそあまがい小せんお付モウ

新やあふとふよとい皆鑿柄
 ころや遠ぬせも是かざりともい之
 祢入しと幸い小不及辨別相衣と小
 ことあままうぶあてともるに急き出

舟のたしあこ
 椿板揪とい小野管の各言を二月と
 と定め生有相ハ人る鳥敷ちくるい諸木
 茶の花もまはのこくに気と中なるい夜ハ

終日あらうと志きき終風くおろしむるの
 うらとあふと日月とまづの老年幼稚のや
 うらうらふれいおほけは陰まはる中
 られいと儂うくとあしすろをいそぐ
 といてうらうら浄るりかろおあつで斗
 物ゆのとりきこをまことすまば四季にふの
 和らうらゆもまぐめを交るゆとられいよは
 風雅人も及ぬかまのの之戒谷とらり

終日あらうと志きき終風くおろしむるの
 うらとあふと日月とまづの老年幼稚のや
 うらうらふれいおほけは陰まはる中
 られいと儂うくとあしすろをいそぐ
 といてうらうら浄るりかろおあつで斗
 物ゆのとりきこをまことすまば四季にふの
 和らうらゆもまぐめを交るゆとられいよは
 風雅人も及ぬかまのの之戒谷とらり

息子の侍る天懸地隔ちよも世々のものや
 せんたる物がるけりや枕るよしそ祈りのも
 かく芭蕉平ハ浮世をトめ聖と祈のひくせ
 とも大陰玉のまゆりごととてあきれ果
 くもてとど親にと息子のそ路をん遠
 も同のゆりや只人やくと人つゝバ始末
 さらるゆとゆりゆゆいづちの儀とるなり
 へのしまろで人やくすまいととも下もさ

道理侍のあはさるいさるのく高人の佩刀
 以いぬ物とくまのまよとすすれて
 風雅とあむハ大陰玉もけしるかん
 けしとあむとるしとる

東唐細見嘯 卷二終



